

水 上 勉
帰 山 の 雁

(上)

帰山の雁（上）

一九七六年十一月二十五日 初版発行

著者 水上 勉

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三（五六二）四三一―

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区真砂町五三

電話 〇六（三六三）一七〇六

印刷所 大日本印刷

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© T. Minakami 0093-363621-3214

帰山の雁 (上) 水上勉

実業之日本社



帰山の雁(上)／目次

一章 うるし搔ぎの弥市が能登の女たきをめとること。

7

二章 異母弟佐一京の禪寺に出家すること。ならびに「性と誕生」について。

52

三章 人間の死について。

97

四章 女の道、男の道。

146

五章 不思議な男が帰山に現われ佐一の父を名のこと。

196

装幀／横手由男

帰山の雁(上)

一章

うるし搔きの弥市が能登の女たきをめとること。

帰山とは私の勝手な読み方なので、じつは越前帰山のことをいう。福井県南条郡今庄村にある部落の名で、日野川上流へそそぐ帰川の谷間である。戸数わずか十七戸。山中七里といわれる山塊の裏なので、ずり落ちるような常緑樹の山麓へへばりついてある。この村へゆく旅人はめったにない。いまふうにいえば、過疎村落の雛型とも申せよう。だが、十七戸の戸数は、古くから、といっても、その古さは遠く万葉、古今の時分から歌に詠まれているので、おそらく千年前からそこにそのまま在ったのは確かである。入母屋軒のふかい屋根づくりは雪のふかいせいだが、川下の橋から川に沿うて帯状にのびる村のたたずまいを眺めていると、華岳や竹喬の冬日帖を思わずにおれぬ閑静さである。こんなところに、こんな戸数の小部落がかくれて在ることに、無性にありがたさがこみあげてくる。

村人は帰川に沿うた二里の杣道を歩いて、いまは北陸線駅のある今庄町へ買物に出る。その途中も、景色の美しい溪谷である。旅人は越路をトンネルでぐりぬける。で、最初にみるのは今庄駅のホームで、ここで窓ごしに、当地名産のつるし柿を買い漁る慣わしだ。じつはこのつるし柿も帰の里の女たちが、軒端の渋柿を丹精し、白粉がふくまで、短い冬陽に干しさらしたものである。柿は、貧富の差も左様に目立たせぬ似たような家々のぐるりに、何本かあり、山へ入ると、さらに持主知らずの大木に鈴なりになっている。冬は炭焼き、春は猫の額ぐ

らしいの田畑を收穫する人々には、猿に喰わせるよりは、野良休みの日を利用して木へよじのぼり、子らとともに收穫して、駅に売り出す才覚である。これとて自然なりゆきであつて、西洋菓子や輸入果物にうつつをぬかす都会人には、流行おくれのこのなりわいも理解されにくい。

全長何キロとかよばれる北陸トンネルは、じつはこの村の背中をぬけた。文明は小村を黙殺した。旅人がこの村とかかわつたのは、あるいは数百年以上も前だろう。旅行ばやりの今日のトラベル地図にも、省略してあるし、「夫木集」で、従三位範宗卿が「雁かねの花とひわけて帰山かへりやまかすみも峯にのこる色香は」と詠み、民部卿みんぶけい為家も、「おのが名や春にたのめてこえつらん帰山路かへりやまぢの雁かりがねのこゑ」と詠んでいた。あるいはまた「続古今集」で定家は「春かすみこし路に雁のかへる山、名こそかすみにかくれざりけり」と。むかしの人は、わずか十七戸しかないかくれた小部落に、都をかさねて憶い、文通もかなわぬ難路の山中の山路を賞で、雁にそのことを托した。

大正八年の秋末の夕方であつた。まだ二十二、三と思われる女が、背中に髪の毛のながい乳呑子ちのみこをくくりつけて、村下の橋のたもとまでくると、土堤の草むらに、ならんで胸から上をだしている六体地蔵の石の台に吐息をついて坐っていた。坐つたというよりは、そこにへたりこんだといったぐあいだ、かなり大きな風呂敷包みを足もとへひきよせて、首筋までかいた汗をふいていた。子は眠っているのか、女が肉ぶとりの白い脇をみせて首を左右にうごかして、タオルを胸へつつこんでも、ぴくりともうごかぬ。みたところ、百姓女で、この近くの在の者とも思

えだが、よくみると多少その顔つきにやつれがみえるのと、はだしの足にからませた赤緒の下駄が新品である様子が、在の者でなくて、町の者かとも思わせた。女はタオルを包みの中へねじこむと、ようやく息をやすめて、ゆっくり部落の家なみを眺めやった。橋は、といっても欄干のあるものではなくて、二本の栗の巨木を、寝かせて、コロをならべた上に土もりしたものゆえ、土橋とよんだ方がいいかもしれぬ。へりには黄色い五弁の小花をむらがらせた草が毛のように生えていて、轆くわあとが二本、筋をへこませて通っており、中高のよりあがつた土の部分に、牛の糞が山になってかたまっている。その向う土堤から、葉の黄ばみかけた桑が、針のような梢をとがらせて、かなり長くつづき、桑畑がきれるあたりから、土堤は一段さがって、村へ走る白い道につながった。両側にせまい水田があつて、刈りとられたあとなので、新しい株が、タワシをちらしたように灰色の水面にういている。女はかなりながいあいだ、地蔵の前に坐つて考えこんでいた。村へ入ろうか、入るまいか、思案しているふうだったが、この時、村口から自転車走らせてきた役場の笹森九造が通りすぎようとしてふと女をみた。

「帰かへのむらの人ですかのう」と女は若い声できいた。「そうだ。おら村の者だ」九造がこたえて、ブレーキをかけて片足ついてみると、女は瓜実の色の白い面立ちを輝かせ、「富田の弥市さんの家はどこかのう」ときく。九造は、またいでいた片足をうしろへひいて自転車をよこに休ませ、ゆっくり女の顔をみつつ、「あんた、弥市さんそこへゆくか。弥市は寝とるで」といった。村の上手にある一軒家。どんづまりの神社下にある富田の親爺が、寝こんだまま出てこないここ一ト月ばかりの家の様子を思いうかべながらそういったのだが、女は急に顔をくも

らせると、

「やっぱり、寝てなはるのですか。かげんはどうかのう。うらは、弥市さんに会いとうて来たが、家の人は会わせてくれるかのう」

とかすかに脅えを語尾にただよわせた。

「会わせるも、会わせねもないだえ。弥市はひとり者だで。あんた、どこから来たな」

女は急にまた輝いた顔にもどった。察するところ、弥市には家人がいて、不意の客は面倒がられるかもしれぬと思っていたけはいだった。

「能登でっす、富津^{ふつ}でっす」

と女はいった。九造はしわばんだ眼を細め、女のどこか町じこみのこなしを感じさせる面持ちに魅かれて、

「そんげな遠いところから。弥市はおめ、ずうーつと寝たきりだな。……見舞いに来なさったのけ」

「ええ、まあ、そんなもんだ」

と女はいって、笑顔をみせると、起きたらしい背なかの子をゆさぶり、「ほな、寄せてもらいます。上の一軒家ですかいね」といいつつ歩きだした。赤い安物の帯をしめて、きものは、銘仙地の大柄な菊だった。それで、年格好はいいあてにくい。九造は、うしろ襟の白い女をいつまでも見送っていたが、ひよっとしたら、弥市の女が来たか、と思った。うるし掻きの弥市は、病氣になったから家に寝ているものの、息災な時はめったにいたことはない。うるし山を

もつ地方の素封家に傭われ、うるしを掻く旅職人だった。

女は橋をわたり終えた時、まだ、自転車に乗らずに、見送っていた九造をふりかえって、わずかに会釈した。そのしなも、他郷の女にちがひなかった。どこことなく色っぽく思えた。役場は帰川とまじわるもう一つの支流の合流点大桐の村にある。そこで、用を終った九造は、すぐ自転車を走らせて帰山部落へもどったが、もちろん、村道に子を背負った女の姿はなかった。で、どんづまりの社下^{やしろした}まできて、道ばたの弥市の家をうかがうと、灯がともっている。ランプに火が入っている。病人一人の家だから、めったにランプはつけていなかった弥市の習慣を知っているのです、やはり子づれの女を弥市は迎え入れたとよみ、家へ帰った。九造はその途中で会った数人の村人に、「弥市の家に子づれ女が入ったぞオ」とわめくように報せている。山柿の橙^{だいだい}いろにむらがつたのが、まだ西陽をうけて光っていた時刻であった。風のないしずかな夕刻だったが、さすがに夜が近くなると山は冷えてきていた。鶉^{つぐみ}のむれが、土堤の稻架^{いねざ}にむらがつて、やかましく啼いていた。

2

うるし掻きといわれる漆収穫職人の弥市は、この日、とつぜん訪れてきた子づれの女を見て魂消た。能登のうるし山持ちでは屈指の部に入る本山家で女中していたおたきだった。

「あんた、おらだ。おたきだいの」

女が戸口でいった時、弥市は寢所からふらふらと出てきて、佇立^{ちやうりつ}していた。

「あんた、かげんがわるいて、どこがわるいだいの」

おたきは物をいわぬ弥市へつづけさまにいったのだ。すると、

「ハガキもせず、不意にはア」

弥市はまずそういったあとで、

「心配したことはねえだが、腰の骨を折ったんだ」

といった。そういえば、歩いてくる時、大きくちんばをひいていた。

「骨を、なら、あんた、木さのぼれねえでねえか」

おたきは、弥市の病みつき顔をみて少しわらった。片えくぼが出来る。その顔は、精いっぱい、いま、不意の訪問を、理由づけようとあせるけはいでもあった。

「なんも音沙汰がねえし、子の顔もみてほしかったで、おら来たんだ。あんた一人なら、おらここにいってもええかのう」

弥市は眼を二、三度力弱くしばたたかせただけで、

「しよがあんめ。帰れい^{けえ}ったって、こんげな時刻だ。ま、泊ってゆけや」

そこへよつこらしよと時間をかけてあぐらをかくと、木尻の新箱に手をのぼし、炉をくべはじめた。

「いくつになった……子は」

「いくつて、あんた、のんきなこというて、誕生すんで一つ半だ。わが子のことおまん忘れたかえの」

「んだな」

「おらんがいいだ。あんたがハガキもよこさねから、なんかあるだ。わけがみたくなつた。ほんとのところは、おまんが嫁さもろたんでねえか……まらずそれが頭にきたで、おっかなびつくりで来ただいの」

「阿呆いうでねえ、おらん嫁はいやだといつたでねえか」

「口は重宝だ。来てみなけりゃわかんね……御主人も行っちこいいうて下さつたで、けさ六時に、富津さ出て、九時に金沢で乗り換えて、いまさつき今庄に着いて歩いてきただいの。遠いのこの村は……はなしにきいていただが、こげん遠いとは思わなかつた」

おたきはそれが性格なのだろう。中性的といえる感じの物言いで、片えくぼのみるからに健康そうな顔をほころばせると、背なかの子をおろして、器用にくるりと前抱きにし、

「おーら、たあちゃん、おめのお父つつあのところへようようたどりついたどお」

とわかりもしない赤子にそういつた。子は、眼をさましていなかったのと、環境がかわつたのを敏感に察知したか、ぐずりはじめたので、おたきは、胸もとを大きくあけると、左乳房をだして、餅のようにふくれた乳をふくませ、

「あんたつて人は、嘘つきかと思うたが、ほんまに一人でいるんだいの」

と周囲をさぐりながらもいくらか不安をもてあます気味でいつた。

「おらのような留守がちな男には嫁はこねえだいな。それに、うるし男は、みんなかぶれるだで……帰^{かえ}の者はいやがるいうてあつた……」

弥市はそこで火吹き竹で火を吹いた。炎があがると、咳を一つして、

「困ったことになった。ふとんがねえだ。おめが来るとわかれば、なんとか工面しといったものを」

おたきは、眼をほそめて、

「なけりやないで、どこにだって寝るだいの。追っ払わねで置いてくれれば、おら、あんたのよこにだって、子供とごろ寝すっから」

弥市は黙って、火つきのわるいしめった薪を火箸でこづいた。

描写をすれば、ざっと、このような光景が、弥市の妻おたきの入居風景といえる。のちに、この時抱かれていた赤子の田鶴が成人して、母から何どもきかされた嫁入り話がこれであった。

「つまりは、おっ母は、おらをつれて、押しかけ女房になってここさ来たことになるか」

と田鶴がいうと母は、

「馬鹿いうでね、押しかけなんぞであるもんか。おめは生れていたんだ。この日、短気おこして家さ入らずに帰^{かえ}っていたら、おめは父^{とこ}なし子だったんだ」

といって涙ぐんだ。もつとも、話をきいて想像するだけのことであって、誕生すぎて間もなかった田鶴に、当時の父の面影も母の面影ものこっていないはずはない。しかし、田鶴が母のことを押しかけ女房といったのには、そういうニュアンスがたぶん、おたき自身の懐古談にくまれているからにほかならない。村の人にきいても、誰もがわらって、